

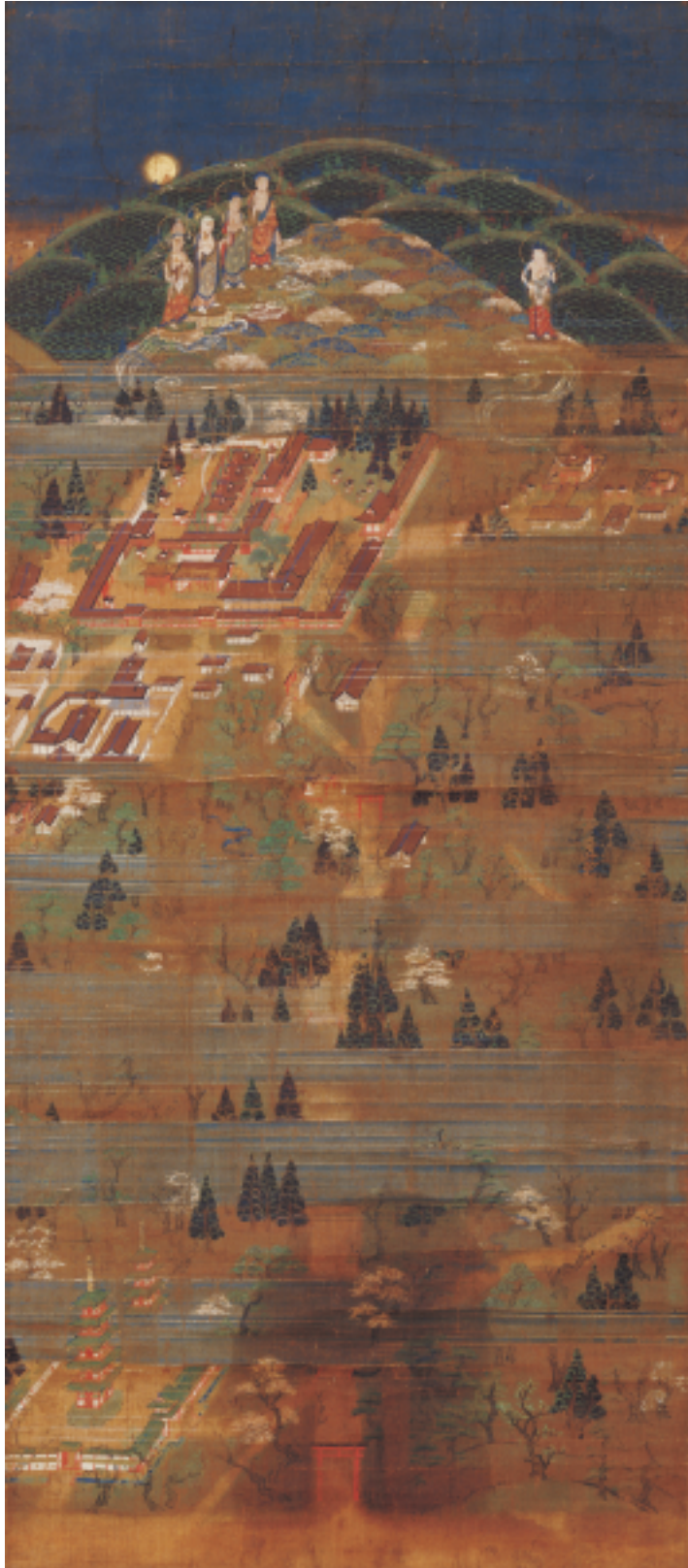


図1 春日宮曼荼羅(徳川乙本) 全図



図3 徳川乙本 右から釈迦如来・薬師如来・地藏菩薩・十一面観音部分

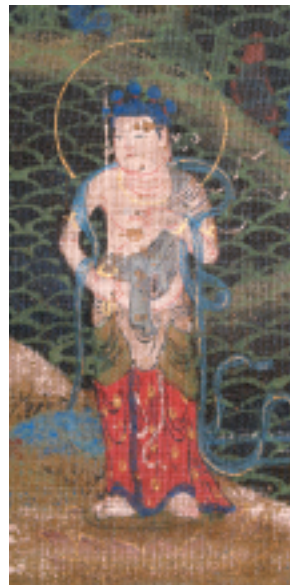


図2 徳川乙本
文殊菩薩部分



図4 徳川乙本 板倉部分

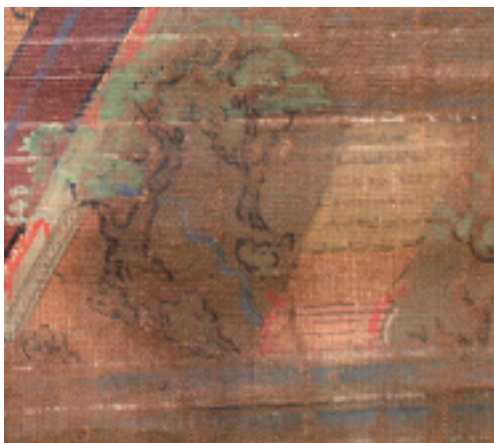


図6 徳川乙本 榎本滝(Ⅰ)部分



図5 徳川乙本 御供所等建築部分

春日宮曼荼羅の一遺例

はじめに

一 品質・形状

二 図様と描法

① 建築物

② 風景

③ 本地仏

三 伝来

① 「仏画類御談示ニ付御屈」および「万松寺御預 仏像類目録」

② 「江戸御小納戸日記」

むすび

はじめに

春日曼荼羅は春日信仰に基づく礼拝画の一種である。文献史料によると、その成立は十二世紀に遡り、春日神を氏神とする藤原氏や興福寺僧を

春日宮曼荼羅の一遺例

安藤 香織

中心に発願・礼拝がされていたと知られる。その後、春日信仰の拡大に伴い、鎌倉・室町時代には貴族・寺僧・神人のみならず南都の庶民層にまで広く流布したため、多数の遺例が確認されている。

春日曼荼羅の図様は多岐にわたる。代表的な図様として、春日神の鎮まる奈良の御蓋山・春日山とともに春日社の社域を広く描いた春日宮曼荼羅があり、他に、藤原氏の氏寺である興福寺を春日社と併せ描いた春日社寺曼荼羅、春日の神鹿を中心に描いた春日鹿曼荼羅、春日社の本地仏および垂迹神を描いた春日日本迹曼荼羅などが挙げられる⁽¹⁾。

徳川美術館には二幅の春日宮曼荼羅が所蔵されている。一幅は、画面上方に御蓋山・春日山から春日社の社頭、さらに一の鳥居に至る春日社域を描き、画面下方に興福寺南田堂の本尊である不空羼索観音を配する図様である。もう一幅は、画面上方の春日山から春日社頭を経て画面下方の一の鳥居まで、長い参道を縦軸にして描く定型的な春日宮曼荼羅で、御蓋山を背景に影向した春日四宮と若宮の本地仏が表されている(図1)。前者は渡辺里志氏により「甲本」と呼称されて詳細が論じられ、山水表現や尊像の

精緻な表現から鎌倉時代後半、十三世紀末から十四世紀に入ってから間もない頃の成立と結論付けられた(以下、本稿でもこれに倣い「徳川甲本」と称する⁽²⁾)。渡辺氏は論中で「乙本」として後者にも触れているが、その記述は簡単な図様の紹介に留まり、表現の類型化・形式化を指摘した上で、室町時代、十五世紀に入ってから南都絵所により量産された同作例の一本と評している(以下、「徳川乙本」と称する)。

春日宮曼荼羅を含む春日曼荼羅研究は、主として古様とみられる作例や特徴ある作例を中核に、春日信仰に関わる文献史料と併せて、図様の展開や思想的背景などが論じられてきた⁽³⁾。春日曼荼羅の成立初期から発展期にあたる、平安時代後期から鎌倉時代にかけてが研究の焦点となる中で、室町時代以降に多数製作されたと見られる定型図様の春日宮曼荼羅が、個々の作品として論じられることはあまりない。しかし、定型化は図像の流布や神仏画製作の効率化が進むに従って起こる現象であり、そこには古様な作例の研究とは異なる別の観点があると考える。また大量に製作されたであろう春日宮曼荼羅のうち、現在まで伝存した作例には作品受容の観点においても意味が見出せると思われる。そこで本稿では、先に示した徳川美術館の所蔵する春日宮曼荼羅のうち、後者の徳川乙本を取り上げ、今一度、図様の詳細や伝来を紹介するとともに、若干の考察を加える⁽⁴⁾。

一 品質・形状

まずは改めて徳川乙本の形態から述べる。本図は絹本着色、絵絹は縦九二・〇糎、横四〇・六糎であり、春日宮曼荼羅としては平均的な大きさである。総寸は縦一七八・四糎、横五七・二糎で、風帯・中廻しには萌黄

地牡丹唐草文金襴、上下廻しには茶地二重蔓牡丹文金襴が用いられている。軸首は真鍮製無文寸切で鍍金が施されている。

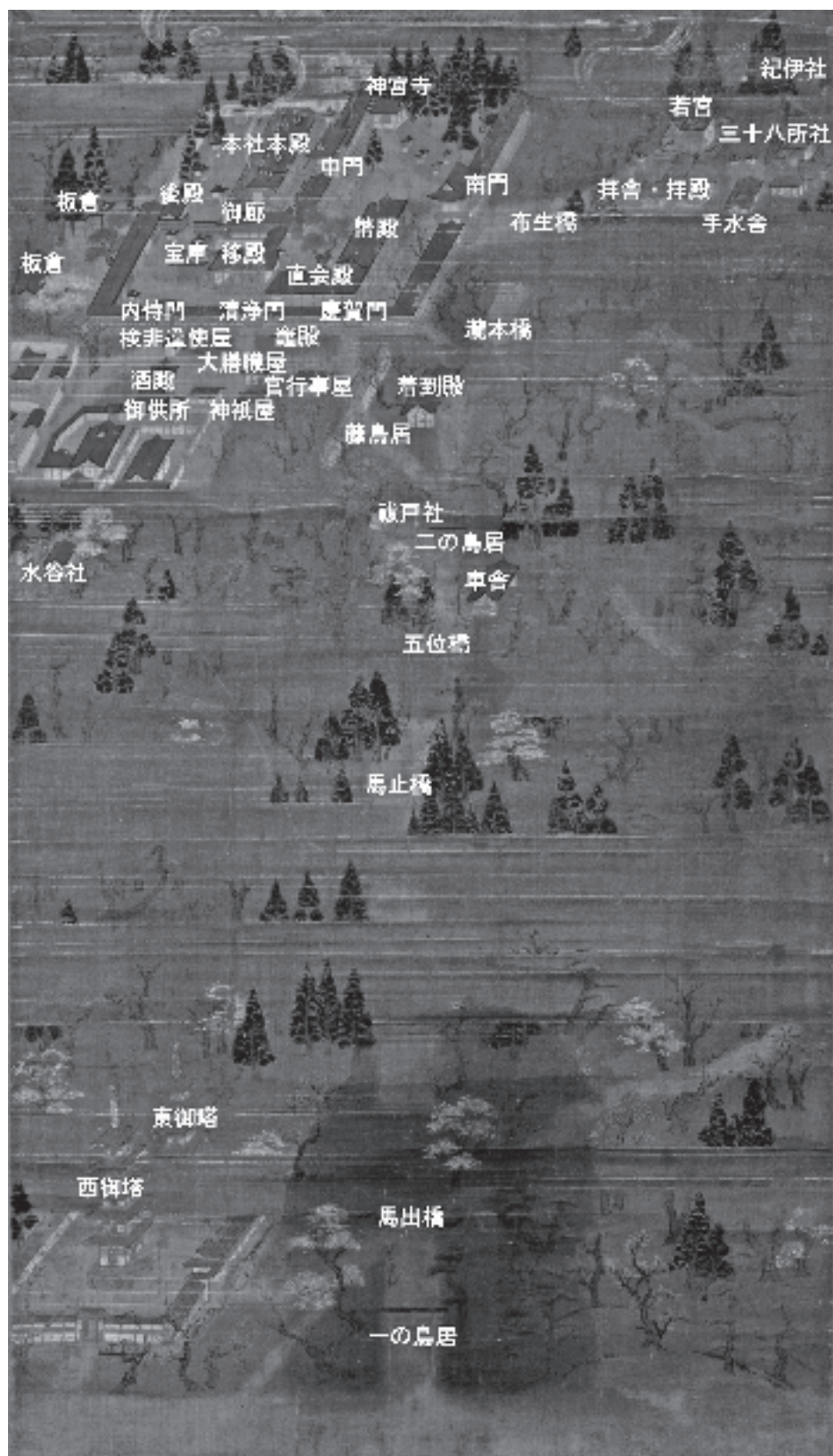
本図は織目の粗い絹を使用している。背後からの透過光は全体に均一であるため、伝来途次の修復等による裏彩色の剥離も考えられる。また顔料の剥落があり、一部に絵絹の破れが確認できる。そのため図様の判別が難しい箇所もあるが、下描きの様子がわかるという利点もある。以下、図様と描法について、画面の観察をもとに記述していく。

二 図様と描法

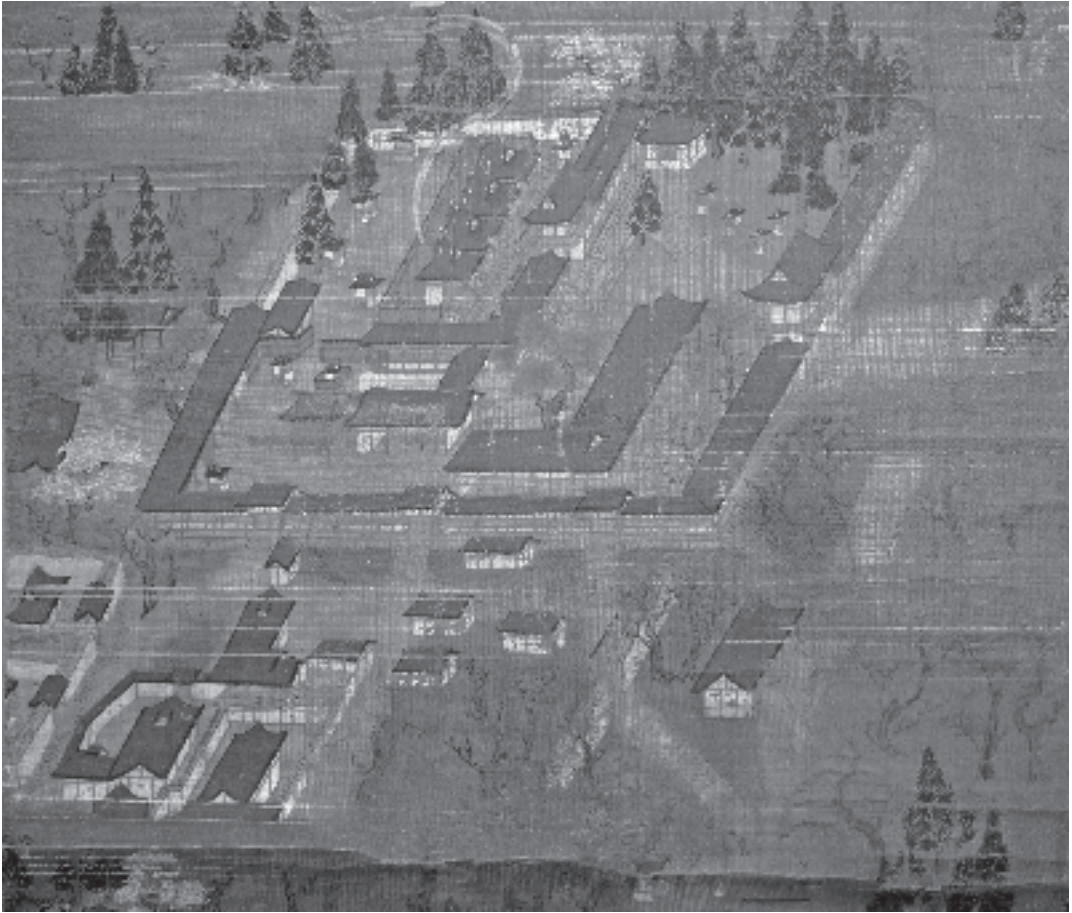
①建築物

春日宮曼荼羅には多数の建築物が描かれており、松村和歌子氏によつて名称の特定がなされている⁽⁵⁾。同氏は現在の社殿はもとより文献史料に依つて特定を進めており、本稿でもこれに従つて建築物の詳細を述べる(挿図1)。

画面上方を東として描かれた本図において、向かつて左上、御蓋山の裾野に大きく描かれるのが春日社の本社社殿である(挿図2)。本社内院には四宮の本殿が東西に並び、それを取り囲むように御廊と中門がある。内院には各所に末社があり、本殿の南東に手力雄社、本殿背後の区域には東壁際に八雷社(八龍神)があるほか三つの末社が描かれている。また本殿北西には後殿がある。中門を出ると二位橋と稲垣があり、中院の区間に入る。中院には東側から神宮寺と青櫛・辛櫛・穴栗・井栗の各末社があり、東西に長い幣殿とそこから北に延びる直会殿、幣殿・直会殿の接続部分の近くに岩本社(住吉明神)が描かれている。直会殿の北隣には移殿と内院御廊に



挿図1 徳川乙本 主要建築物図(画面上方：東)



挿図2 徳川乙本 本社社殿部分



挿図3 徳川乙本 若宮社部分

接続する捻廊があり、その脇には朱塗で高床式校倉の宝庫と、風宮・椿本（角振明神）・多賀の各末社が描かれている。中院の周囲を巡る廻廊には南門のほか、西側にも南より慶賀門・清浄門・内侍門が設けられている。

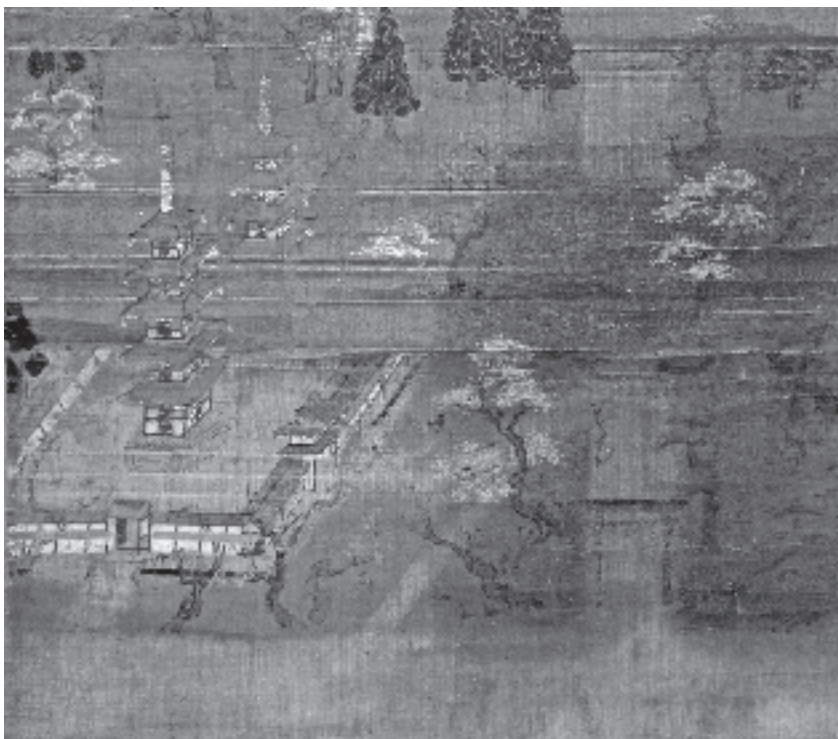
若宮社は画面右側に配されており、瑞垣に囲まれた内院に若宮社と通合社・手力雄社が描かれている（挿図3）。

次に、本社及び若宮社の内院・中院より外部、外院と呼ばれる社域の建築物を見ていくことにする。まず若宮の周辺では、若宮内院に接して拝舎・拝殿があり、その北側に三輪（一童社）・兵主・南宮、南側に広瀬（鬼子母神）・葛城（懸橋明神）の各末社が描かれている。さらに南側には、手水舎を挟んで瑞垣に囲われた三十八所社とその拝殿が表され、画面端に佐良気社、東の山側には紀伊社とその拝殿が描かれている。

再び本社付近に視点を戻すと、本社の北側には朱塗・高床式の板倉が二棟ある（挿図2）。また南門から参道を少し下ったところに着到殿、その北側には築地塀と一体となった藤鳥居があり、その奥に官行事屋とへつどの大膳職屋・神祇官屋が描かれている。さらに北側には、検非違使屋・酒殿・御供所等、社務関係の建築物が描かれている。着到殿から参道を西へ向かうと二の鳥居があり、その北側には祓戸社、さらに北側の画面端には水谷社と拝殿、その東脇に船戸社が表されている。二の鳥居の西側には車舎があり、そこから参道を下ると画面下端に一の鳥居がある（挿図4）。その北側に描かれているのは東御塔・西御塔である。西御塔は楼門のある廻廊に囲まれ、基壇と五重塔の全容が描かれるが、東御塔は二層の屋根より下は霞に隠れている。また、参道には橋が掛けられており、東西御塔の前の馬出橋、一の鳥居と二の鳥居の中間にある馬止橋、二の鳥居手前にある五位橋、着到殿の奥にある瀧本橋、本社から若宮へ

向かう参道の分岐にある布生橋の五つが描かれている。

以上の建築物の彩色法を見ると、基本的に、白壁に柱や扉を朱、連子窓を緑青で描いている。檜皮葺の屋根は赤褐色とし、輪郭線の肥瘦で檜皮の厚みを表現したうえで、棟の瓦を群青で着色している。瓦葺の東西御塔とその回廊は屋根を群青で彩り、御供所にも一部瓦葺を示すと見られる



挿図4 徳川乙本 一の鳥居・東西御塔部分

挿図6 春日宮曼荼羅 板倉および御供所等建築
部分 根津美術館蔵 重要美術品

挿図7 春日宮曼荼羅 板倉および御供所等建築
部分 石山寺蔵

挿図5 春日宮曼荼羅 全図 湯木美術館蔵

挿図8 春日宮曼荼羅 板倉および御供所等建築部分
MOA美術館蔵

灰色の賦彩が確認できる。本社本殿・若宮社の千木や、本社・摂末社社殿の垂木の先端、東西御塔の水煙など、実際に金属製の装飾が付属していることが多い部分には、金彩が施されている。加えて参道などの一部にも金泥による賦彩がなされている。現状では、参道から藤鳥居までの石段付近、本社廻廊西側の三つの門の付近、本社中院の椿本社付近において、淡い着彩の下に金泥の粒子が確認でき、この他の部分は剝落したと考えられる。

以上、徳川乙本に描かれた建築物を確認してきたが、これを春日宮曼荼羅の唯一の基準作で正安二年（一三〇〇）の銘記がある湯木美術館本と比較してみたい（挿図5）。両者は、本社及び若宮社の内院・中院をはじめ、ほとんどの建築物で図様が一致する。⁽⁶⁾ また、基本的な彩色法も似通っている。湯木美術館本は定型の春日宮曼荼羅を代表する作例であり、まずは本図もその一例であることが確認される。一方、本図においては次のような変化がみられる。

1、外院・本社社殿北側には板倉一棟が所在したが、本図ではその東側にT字型の平面を持つ朱塗の板倉が一棟加わっている（図4）。

2、外院・御供所を含む堀に囲まれた建築物の一群が描かれているが、本図では堀の形状が変化するとともに、内部の建築物も構造が変わっている（図5）。

この二点は、湯木美術館本だけでなく、古様な景観を示すとされる法隆寺本や、描写が正確・緻密であると評される奈良南市町自治会本など、十三世紀中に成立した作例には見られない特徴である。一方、十四・十五世紀に描かれたとされる春日宮曼荼羅諸本においては、1は比較的多くの作品に確認でき、2は例えば根津美術館本（鎌倉時代十四世紀、重要美術

品・石山寺本（鎌倉時代十四世紀）・MOA美術館本（南北朝時代十四世紀）などに描かれている（挿図6・8）。これらの変化をどのように捉えたら適切だろうか。一つには写し崩れの可能性が疑われるだろうが、春日宮曼荼羅の主要な図様は紙形によって描き継がれていたと見られており、⁽⁷⁾ それを前提とするならば両者とも写し崩れと言うには変化が大きいように思われる。また同様の作例が群として確認できることは、写し崩れよりむしろ、紙形そのものの変容を示していると考えられる。

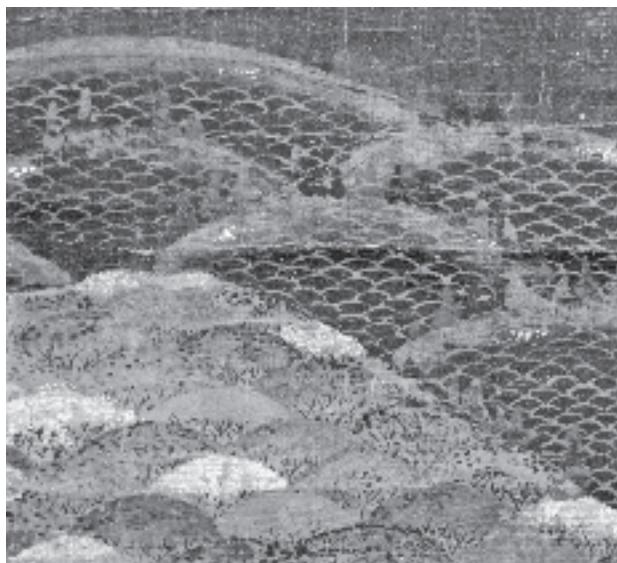
ここで想起されるのは、春日宮曼荼羅の境内描写は史料から知りうる境内景観の変化にかなりの程度合致しているという、松村氏の指摘である。⁽⁸⁾ 松村氏は主に定型化以前の作例について述べており、本図はこの見解の内に含まれないが、十四・十五世紀に至って新たに変化した上述の建築物についても、ある時点における実際の増改築を反映していると考えれば、違和感なく首肯できる。増改築の時期の解明は今後の課題であるが、一定の年代観の指標となりうるモチーフとして記憶しておきたい。

最後に、紙形の変化の意味をもう少し考えたい。本社・若宮社社殿や塔など主要建築物は、現実の建築物が失われた場合にも、時代を超えて諸本に描かれており、その類型的な描写からしても紙形の使用による図様の規制が看取される。⁽⁹⁾ 他方、先に指摘した建築モチーフの変化と特定の時代における共通性は、時代による紙形の変化を示している。これらのモチーフに変化が許容されたのは、前者に比して春日社を指し示すモチーフとしての重要性が低いためであろう。しかし逆に言えば、許容される範囲内でモチーフを変化させることによって、現実の春日社の景観に近づけようとしているとも捉えられる。受け継がれた紙形を用いて春日社の「あるべき姿」を描きながら、時代に則した変化を加えて現実味を持たせようとする

意識が看取できる。⁽¹⁰⁾

②風景

次に、建築物以外の風景表現を見ていこう。本図の画面上方には御蓋山を中心に、背後に春日山、画面左端に若草山の裾野が描かれている(図1)。御蓋山は、半円状に重ねた白・白緑・赤褐色の地に墨で幹枝を描き、群青・緑青・白・赤褐色の点描を有機的に重ねることによって、多種の木々が生い茂る様を表している(挿図9)。春日山は左右対称の山形で、山の端には金泥で円相が、左右の裾野には涌雲が描かれている。山の稜線は暗青色の地に淡い緑青の円弧で表され、その内側を緑青の円弧の連なりで



挿図9 徳川乙本 御蓋山・春日山部分

埋めてウロコ状に樹林を描いた上で、稜線に群青・緑青・赤褐色の樹影が添えられている。このように、御蓋山を半円形を重ねた木々で明るく色とりどりに表し、春日山をウロコ状に暗めの色味で描く表現は、十四、十五世紀の春日曼荼羅に散見される描法であり、その初期の例が文永十年

挿図10 春日若宮影向図 御蓋山・春日山部分 大東急記念文庫蔵

(一二七三)の銘記がある「春日若宮影向図」(金剛般若波羅蜜經見返絵、大東急記念文庫蔵)に見出される(挿図10⁽¹¹⁾)。「春日若宮影向図」の描写と比較すると、本図の描写はより整理されており、単純化された表現になっている。また「春日若宮影向図」も含め、春日曼荼羅の多くでは、春日山は向かって右端の稜線に特徴のある形態で描かれ、春日宮曼荼羅の定型図様にも共通するが、本図では左右対称の山形に描かれる(図1・挿図5・10)。

これは本来あるべき図様が単純化された表現と考えられ、先の山景の描法とも合わせて、時代の降下が窺われる。

御蓋山の裾野には霞がかかり、そこから画面下部にかけて

は本社・若宮から一の鳥居までの社域が、参道を中心軸にして描かれている。霞は参道の長さを強調するように所々に棚引いており、いずれも群青のグラデーションに白線を添えている。また、群青と白の線描が水平に引き重ねられる場合もある。こうした霞の表現は、「一遍上人伝絵巻」(正安元年(一二九九)、京都・歓喜光寺ほか蔵、国宝)や「春日権現験記絵巻」(延慶二年(一二三〇九)、宮内庁三の丸尚蔵館蔵)などの絵巻をはじめ、縁起絵や社寺曼荼羅など鎌倉時代以降の絵画に広く見られる。

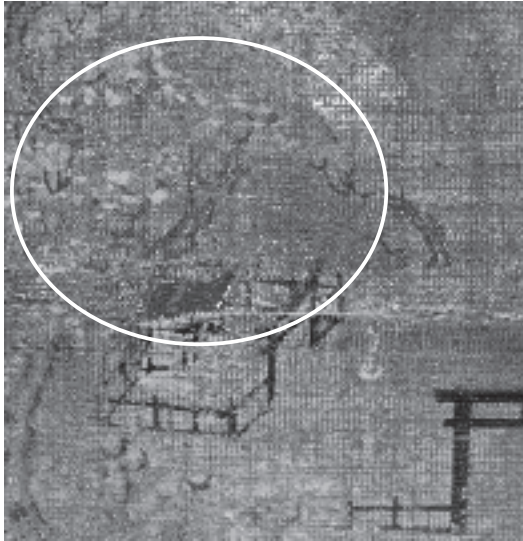
社域に描かれた風景モチーフについては、行徳信一郎氏によって春日宮曼荼羅各本の共通点が論じられている¹²⁾。行徳氏は、風景モチーフにも共通して描かれる素材があり、春日宮曼荼羅の定型図様の底辺にある紙形のイメージが、仏教絵画の図像ほどではないものの、連綿と継承されていたことを明らかにされた。本図にはどの程度のモチーフの継承が見られるのか、ここで確認しておきたい。同氏の論中で抽出されている風景モチーフと、比較対象とされた二十七点の作例のうちの該当点数は表1の通りである。このうち徳川乙本にも描かれているモチーフは築地堀沿いの杉(A)・影向杉(C)・大杉カ(D)・榎本滝(I)・祓戸社背後の樹木(M)・神垣森(N)・馬出・馬止橋間の杉木立(O)・影向松(Q)・Qの隣の松(桜)(R)・群生する松(S)である(図6・挿図11~16)。いずれのモチーフも行徳氏の論中で比較対象に挙げられた作例の多くに描かれているモチーフであり、本図においても主要な図様の踏襲が見て取れる。また本図における各モチーフの描かれ方はそれぞれ簡略であるが、それと認識できる形態は失っていない。例えば、本社廻廊の南側から流れ出た水流が形成する小さな人口の滝、榎本滝(I)は、群青の線を波打たせることによって水の落ちる様を表現し、その両脇に岩の皴を描いている(図6)。他の作例でも明確に描かれ

ることが少ないことが指摘されており、写し崩れというよりは、小さなモチーフを単純化し的確に表現していると捉えたい。一方、画面下方のO・Sの各モチーフは近景として比較的大きく明確に描かれているが、影向松(Q)については丁度剥落の激しい位置に当たる。そのため残念ながら全容は把握できないものの、樹幹を墨線で描いて褐色に塗り、緑青で葉叢を表した後、その下端に細枝を墨線で描き起こしていることが確認できる。

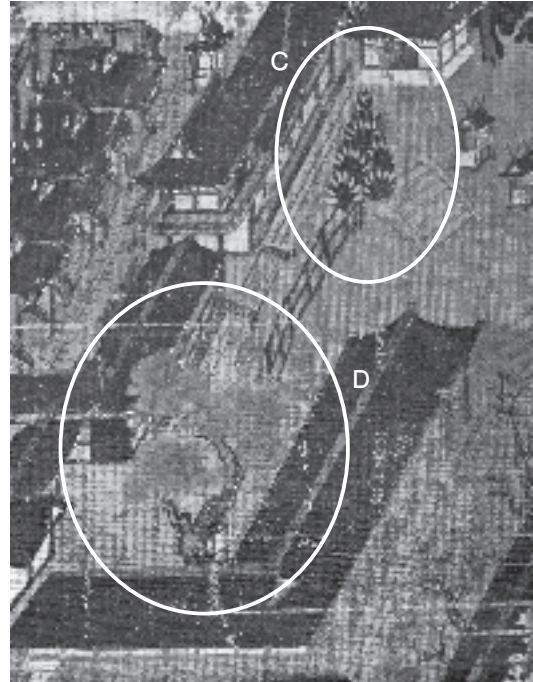
以上の規定されたモチーフのほか、本図には緑の野に杉・松・桜をはじめとする樹木が配されており、剥落のため判別しにくい小さな鹿も数頭描かれている。



挿図11 徳川乙本 築地堀沿いの杉(A)部分



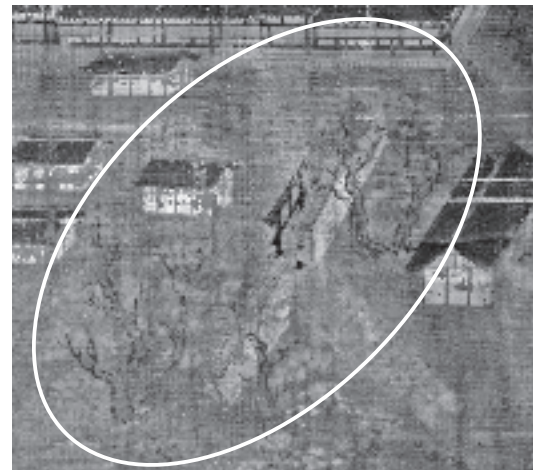
挿図13 徳川乙本 祓戸社背後の樹木(M)部分



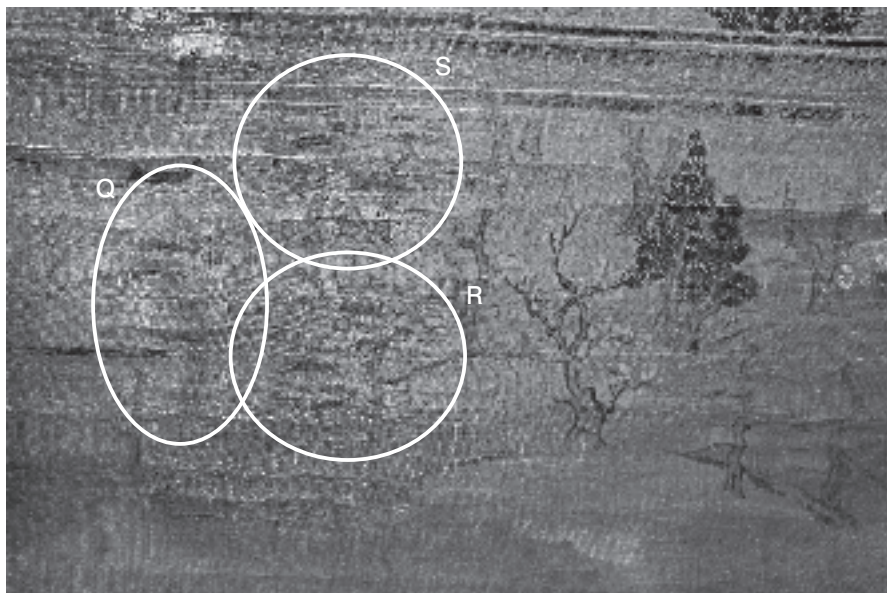
挿図12 徳川乙本 影向杉(C)・大杉カ(D)部分



挿図15 徳川乙本 馬出・馬止橋間の杉木立(O)部分



挿図14 徳川乙本 神垣森(N)部分



挿図16 徳川乙本 影向松(Q)・Qの隣の松(桜)(R)・群生する松(S)部分

③本地仏

本地垂迹思想に基づき、春日諸神には次の通り本地仏があてられている。

一宮 武甕槌命 不空罽索観音または釈迦如来

春日宮曼荼羅の一遺例

二宮	經津主命	薬師如来
三宮	天児屋根命	地藏菩薩
四宮	比売神	十一面観音
若宮	天押雲根命	文殊菩薩

本図には御蓋山を背景に、本地仏が描かれている(図2・3)。画面向かって左手には、社殿の並びに則して、右奥から順に本社四宮の本地仏である釈迦如来・薬師如来・地藏菩薩・十一面観音が配されており、この四尊と向かい合うように、画面右手には若宮の本地仏である文殊菩薩が描かれている。一宮に釈迦如来をあてることが、解脱上人貞慶(一二五五―一二二三)の思想の影響と考えられており、現存する春日曼荼羅の多くに共通する。各尊はそれぞれ薄く白を刷いた雲上に表されている。本社四宮の雲の尾はまとまって本殿の四宮のあたりより、若宮の雲の尾は若宮社の内より、左右にうねりながら各尊まで達しており、各尊がまさに今、社殿から影向したことを示している。

本地仏は春日宮曼荼羅を含む春日曼荼羅の諸本で表し方が異なっており、大きくは正面向きの坐像または立像として描かれる一群と、本図のように左右への動きを伴う立像として描かれる一群に分けられる。湯木美術館本に代表される正面向きの形式は、円相中に表されることが多く、動的な要素も少ないため、春日本地仏の概念を図式的に示す目的をより強く感じさせる⁽¹³⁾。これに対し、動的な要素を伴う本図のような立像形式は、同じ概念を物語的あるいは説話的に示す目的を感じさせる。立像形式は、本図とほぼ同様に本地仏を配する奈良国立博物館蔵「春日社寺曼荼羅」(鎌倉・室町時代十四世紀)が著名であるが、他にも種々の図様があることからして、先のような目的のもと、発想を豊かにして製作されたと考えられる。

徳川乙本に表された各尊について、詳細を見ていくことにする。一宮の釈迦如来は、ほぼ正面向きの姿で、施無畏・与願印を表している(図3)。頭光は一重で金泥線によって描き、頭髮は群青で彩り、肉髻朱を表し、髪際を白緑で縁取っている。肉身はやや赤みのある白肉色で彩色してから朱の鉄線描で輪郭線を描き起こし、眉や目は墨線で描き、唇は朱で彩っている。服制は標準的で、裳を着け、衲衣を偏袒右肩にまとい、右肩に掛けられた衲衣の端の下には偏衫が見られる。衲衣・偏衫ともに腹前や袖口に裏面の色が見えるが、ほぼ誤りなく合理的に着色がなされている。また衲衣・裳には金泥で文様が描かれている。蓮華座は、蓮肉部を緑青で彩り、蓮弁の輪郭を金泥線で表している以外、彩色の詳細は判別できない。

二宮の薬師如来は、画面中央に向かって斜め向きに立ち、右手は胸前で第三・四指を捻じ、剝落によって判然としないが左手には白青色の薬壺を載せていると見られる。基本的な描法や着衣法は釈迦如来と共通している。

三宮の地藏菩薩は、やはり画面中央に向かって斜め向きに立ち、右手に錫杖、左手に宝珠を持する姿で描かれる。地藏菩薩も基本的な描法や着衣法は上述の二尊と共通するが、剃髪した頭部を白群で彩色し、衣の文様以外に錫杖および瓔珞・臂釧・腕釧など金属製の持物・装身具も金泥線で描いている。蓮華座は蓮肉部を緑青とし、蓮弁は先端へ向かって白緑から白のグラデーションによって表されている。

四宮の十一面観音は、前の二尊と同様に画面中央に向かって斜め向きに立ち、右手を垂下し、左手には蓮華を持する姿で描かれる。十一面観音は頭頂に仏菩薩面を十一面戴くのが通常である。本図では非常に細かい部分であるものの、各面の頭髮を群青、肉身線と唇を朱、眉と目は墨線で適切

に描いているため、おおよその図様の見当がつく。まず金泥線で天冠台を表した上で、中央に阿弥陀の化仏を示すと見られる尖塔形の光背を配し、その向かって右側に二面、左側に三面の仏菩薩面を二段重ねて描き、さらにその上部に一面、合計十一面を描いている。精度の高い描写とは言い難いが、この細かい部分に十一面を描ききっているところに、むしろ本図の製作者の技量を見ることができよう。

十一面観音も頭髮や肉身の彩色法は釈迦如来と同一である。服制は裳に腰布(上裳)を着け、条帛を右肩から左脇に垂らし、両肩から天衣を垂らして両腕に掛ける、菩薩の典型的な姿で描かれている。天衣は長く後方へ翻り、天冠台に付属する白い帯も同様に棚引いている。蓮華座の蓮弁部分は剝落が激しいが、一部に朱の具が観察できるため、朱のグラデーションによって彩色されていたと推定される。

最後に、若宮の文殊菩薩は五髻の童子形で、右手に剣を持する姿で表されている(図2)。若宮の本地仏は、このような五髻文殊の姿で描かれることが多い。頭髮や肉身、持物・装身具などの彩色法は他の尊像と一致している。また服制は十一面観音とほぼ共通しており、裳・腰布(上裳)・条帛・天衣を纏い、白い腰帯が垂下する様子も描かれている。蓮華座の蓮弁部分は先端に向かって白から紫へのグラデーションが判別できる。

ところで地藏菩薩および十一面観音は、面部から胸部にかけて顔料の剝落があり、下描きの状態が観察できる。いずれも描き起こし線に比して太目の肥瘦ある墨線で、細部まで下描きをしている。また、描き起こし線とはややずれが見られることから、仕上げの段階で図様に若干の修正が加えられていることが判明する。

以上、建築物・風景・本地仏の三点から本図の図様と描法を述べてきた。結果、本図は図様・描法ともに定型図様のうち十四～十五世紀の作例と共通する部分が多く、絵絹の目の粗さ、春日山の形態などからすると、製作年代は渡辺氏の提示した通り、室町時代も十五世紀と考えられる。

春日宮曼荼羅の製作の大部分は南都・興福寺の絵所が担ったとされ、京都における製作の可能性も指摘されている。本図の場合、御蓋山・春日山の彩色法には興福寺芝座の絵仏師と見られる観舜が製作した「春日若宮影向図」と共通する伝統的な描法が見られた。また全体的に筆致は淀みなく、よく訓練されて慣れており、特に本地仏五尊はわずか六センチに満たない尊像を、緻密かつ軽やかに、闊達な筆で描いていることが注目される。実際の建築物の変化に合わせた紙形による定型図様であること、平明な色彩であることからしても、本図はやはり南都絵所の絵仏師による作図と考えられる。

三 伝来

①「仏画類御談示ニ付御届」および「万松寺御預 仏像類目録」

徳川美術館蔵の仏画の伝来については、山本泰一氏によって論じられている⁽¹⁴⁾。まずは山本氏の論文に従って、本図に関わる記録を確認し、大まかな流れを捉えたい。

一つ目の古記録は、明治七年（一八七四）の「寛政三亥年御預ケ相成候 仏画類御談示ニ付御届」（徳川林政史研究所蔵。以下、「仏画類御談示ニ付御届（a）」と略称する）である。これは、尾張徳川家の所有していた仏像・仏画類が同家九代宗睦（一七三二～九九）の時代、寛政三年（一七九二）に、尾張藩内の寺

院へ預けられ、十代斉朝（二七九三～一八五〇）の時代、文化十四年（一八一七）十一月に再び同家へ引き上げられたことを示す史料である。預け先となったのは、尾張徳川家の菩提寺である建中寺、初代義直の生母相応院のために建立された相応寺、二代光友の生母歡喜院のために建立された大森寺、徳川家康四男松平忠吉の母宝台院のために建立された性高院、同じく家康八男仙千代のために建立された高岳院の五ヶ寺で、いずれも藩内で高い寺格を誇った浄土宗寺院である。本記録では、尾張徳川家からの問い合わせに対し、五ヶ寺がそれぞれ過去の留記を基に先の経緯を回答し、その当時預けられていた宝物類についても目録を付している。各寺院の目録は山本氏の論文にて翻刻されているためここで詳細は省くが、このうち建中寺および相応寺に一幅ずつ「春日曼荼羅」の名が見える（括弧内は筆者による注、以下同）。

（建中寺 二十三件のうち十四件目）

一 春日曼荼羅

（箱入 壹幅）
同

（相応寺 九件のうち三件目）

一 春日曼荼羅

箱入 壹幅

山本氏はこの二件について、建中寺の画像を本稿で扱っている徳川乙本、相応寺の画像を徳川甲本と特定された。その根拠は示されていないが、右の通り両者の記録はほぼ同一であり、この情報のみによる断定は難しいと思われる。

文化十四年の引き上げの後、これらの宝物類は、それまで名古屋城小天守御物置に納められていた仏像・仏画類とともに、万松寺宝蔵に移され

た。万松寺は建中寺・相応寺に次ぐ寺格の曹洞宗寺院であり、その宝蔵は、宝物類引き上げの翌年、文政元年（一八一八）に建立されている。この一連の流れについて、山本氏は『金城温古録』の一節から、斉朝の病を平癒した僧豪潮の働きに注目し、文化十四年における豪潮の名古屋招聘を以て仏像・仏画類の整理が始まったと指摘し、宝蔵の建立も、豪潮が文政二年まで万松寺に止宿した故に万松寺に建立されたのであり、文政元年から遠からぬ頃に宝物類が移されたと推定された。さて、万松寺へ納められた際の状況は、嘉永六年（一八五三）改訂の墨書がある「万松寺御預 仏像類目録」（徳川美術館蔵。以下、「万松寺目録（b）」と称する）から窺える。この目録は木像之部・菩薩之部・明王之部・天部・掛物之部・法宝之部に分類されており、掛物之部には五十六件が記載されている。このうち四十三件目に「春日図曼荼羅」、五十三件目に「春日曼荼羅」と記されている。

掛物之部

（中略）

一 春日図曼荼羅

縹装上下茶地紗金住吉ノ初代七百年

来ノ古物不空絹索二月堂ノ本尊

（中略）

一 春日曼荼羅

大縁茶金欄中縁萌黄金欄軸真鍮

付記の情報により、前者は徳川甲本、後者は徳川乙本と特定できる。このことから、遡って「仏画類御談示ニ付御届（a）」に記載がある「春日曼

荼羅」二幅も、徳川甲本・乙本であったと判明するが、やはり建中寺と相応寺のいずれに預けられたかは不明である。

この後、万松寺宝蔵に納められていた仏教遺品は明治八年に名古屋大曾根の徳川家邸内に移され、昭和六年（一九三二）以降は財団法人尾張徳川黎明会の管理下に置かれた。以上が山本氏の明らかにされた本図に関わる記録の概要である。

②「江戸御小納戸日記」

ここで、新たに判明した「江戸御小納戸日記」（徳川林政史研究所蔵 明和五年（一七六八）六月二日および寛政三年三月二十六日の各条を提示したい。これらの記録から、寛政三年に仏像・仏画類が五ヶ寺に預けられた理由、そしてそれより二十年以上遡る明和五年、それらの仏像・仏画類が建中寺へ一括して預けられたことがわかる。まずはこの一連の経緯がわかる寛政三年の記事、続いて内容を補足できる明和五年の記事を紹介する。¹⁶⁾

（寛政三年）
三月廿六日

（中略）

一 竹中彦左衛門方々別紙書付三通被相渡

御内慮伺候様申聞有之候付 尾州同役々

申越候付則奉伺候処申達候趣

思召不被為 在伺之通被 仰出候与之御事ニ付

其段有便尾州同役江申遣候別紙書付

為見合記置候

一 明和五子三月朔日於

御城吉田主水于時御庭御足輕頭 林又左衛門江申聞候者

是迄御小納戸向ニ有之候御仏具別紙目錄

之品向後建中寺江御預ケ置被遊度

思召ニ候指支マシ者有之間敷哉と相尋候付

差支之儀ハ無之由及答候 左候ハ、御小納戸

小山藤十郎取扱候間 御留守江相成藤十郎江

引合宜取扱候様致度旨 主水申聞別帳

相渡候付右品相渡り候節者品々之巨細

帳面ニ委相認建中寺江忒帳此方役所

江も忒帳相渡り候様藤十郎江宜申談

被置候様致趣主水江申仲置候マシ

一 同五月廿六日小山藤十郎分申越候趣如左

当春

御発駕前及掛合申候仏鉢并仏具類

建中寺江御渡ニ相成候儀 其御役所より

建中寺江御渡させ被遊候而も 又は役所分

直ニ建中寺江御渡ニ相成候而も差支候筋

無御座候旨御申聞被成候 仍而江戸表江相伺

候処 右は其役所分建中寺江相渡させ

候之様ニ与之御事之旨申来候付 右品々

入記相添下役指添御役所江相廻候様

可致候間 宜ク取扱建中寺江御引合

相済候様致度存候 且又右品々相廻候

日限之儀いつ比相廻させ可申哉 御申越

春日宮曼荼羅の一遺例

被下度候 以上

五月廿六日

小山藤十郎

林又左衛門様

一 六月四日藤十郎分添手紙を以入記相添

御小納戸詰川崎伴藏差添仏鉢

御道具類御長持三棹ニ入役所江為持差越

候付 夫々入記ニ品々引合させ請取之則

即日建中寺役者養寿院并塔頭

甲竜院呼出入記目錄を以相渡させ候

一 建中寺初願書写

覚

建中寺江先年從御役所御預相成申候

別記仏像仏画類之儀 右御寺宝藏江

入置年々御役所御立合ニ而虫干御座候

然処右宝藏江入置殊更御役所御封印ニ

御座候而者 朝暮香華供養等行届

不申 殊ニ何れも霊像又者古徳之名画

名筆之御懸物類ニ而末代希成品共ニ

御座候得ハ 誠ニ仏祖之冥慮も如何

奉恐候 就中宗祖

円光大師直筆数遍名号之儀ハ

瑞竜院様格別御崇敬被為遊

候之由伝承仕 当御宗門ニおゐてハ至而

希有之宝物ニ御座候処 猶更朝暮供養も

仕度奉存候可成御儀ニ御座候ハ、右仏像

仏画像類御役所ハ御封印之儀ハ相離

已来御寺方五ヶ寺之内江配当御預ニ被

仰付被下候様仕度奉存候 左候ハ、夫々御預

申上置朝暮香華供養等も仕度且

前願円光大師数遍名号之儀ハ依

勅命為天下安全祈禱被相認候之趣

御座候得ハ 年々正月十五日其外ニも

追々建中寺江相寄右名号を本尊ニ

いたし御武運長久五穀豊熟万

民安穩之為百万遍念仏修行仕度

奉存候 旁以右仏像仏画像別紙書分ヶ候

書面之通何卒夫々御寺方江御預リニ

被仰付被下候様仕度偏奉願候 以上

亥三月

高岳院

大森寺

相応寺

建中寺

寺社御奉行所

一 仏像仏画像類目録

建中寺
御厨子入

一 阿弥陀如来

一 躰

一 但木仏立像

一 釈迦如来

御厨子入
一 躰

但焼物

(後略)

(明和五年)
六月二日

(中略)

一 御側御道具之内有之御仏躰并仏

具類建中寺江為御渡被遊候との御事ニ候

御発駕前寺社奉行林又左衛門方へ

掛合御留守方御小納戸小山藤十郎方へ

有掛合之趣共申繼置候處引渡方之義

答合申来候付奉伺候處 寺社役所へ相廻シ

有役所建中寺被為引渡候やうにと

の御事ニ付 先便藤十郎方へ委細

申遣候 仍而寺社奉行又左衛門方へ

左之通相廻候旨令着便藤十郎方へ

申来候

仏具御長持入記控

壺番

一 仏

御厨子入
一 躰

但木仏

御厨子蠟色金御紋付かな物金めつき地七子

唐草毛彫

一 仏

御厨子入
一 躰

但焼物

御厨子黒塗内金かな物めつき唐草

(後略)

以上の記録によれば、まず明和五年の三月一日、御庭御足輕頭・御小納戸頭取の吉田主水から寺社奉行の林又左衛門へ、藩主宗睦の意向によりそれまで御小納戸向(御側御道具)であった仏像・仏具類を建中寺に預け置きたい旨が告げられている。この時期は丁度、宗睦が参勤交代で名古屋を発つ直前である。そのため、この件は名古屋の留守方となる御小納戸小山藤十郎の取り扱いとなり、又左衛門は主水へ、預ける品々の詳細を帳面に記し、建中寺と寺社奉行へ提出するべく藤十郎に指示するよう伝えている。続いて五月二十六日には、藤十郎より又左衛門へ、仏像・仏具類は寺社奉行から建中寺へ渡すよう江戸表から指示があったため、品々に入記と下役を添えて寺社奉行へ廻すこと、またその時期についての問い合わせが書状にて述べられている。次に、六月二日には江戸御小納戸へ藤十郎から「仏具御長持入記控」(以下、「入記控(c)」と称す)が届けられており、建中寺へ渡す品々の詳細が判明する(表2参照)。そして同月四日には、長持三棹に入れられた仏像類が、入記と御小納戸詰川崎伴蔵を差し添えて、寺社奉行へもたらされ、仏像類と入記とを突き合わせて寺社奉行が受け取った後、即日建中寺へ渡したと記されている。

それから二十三年後の寛政三年三月、建中寺は以上の経緯で預けられ宝蔵に保管されていた品々を、改めて五ヶ寺に配分してほしいとし、「仏像仏画類目録」(以下、「建中寺初願目録(d)」と称す)を添えて寺社奉行へ願ひ出ている(表3参照)¹⁶⁾。この願ひによると、宝蔵に保管された品々は寺社奉行が封印しており、毎年役所の立ち合いのもと虫干しがあるものの、日々の供養はできずにいるという。預けられた品々は名品ばかりだが、中でも

浄土宗祖の円光大師法然直筆の名号は尾張徳川家二代光友も崇敬していた品であり、なおさら供養したいとのことで、浄土宗五ヶ寺へ配分して預けてもらえれば、日々の供養を行うほか、正月十五日には建中寺にて先の名号を本尊として武運長久・五穀豊熟・万民安穩を祈念し百万遍念仏もしたいと訴えている。寛政三年の記事冒頭によると、この願ひは尾張御小納戸を經由し、江戸御小納戸から宗睦に伺いを立て許可を得た旨が、同月二十六日に尾張御小納戸へ知らされている。「仏画類御談示ニ付御届(a)」に収録された大森寺からの返答に「寛政三亥年建中寺ニおゐて御預り申上候」とあり、また性高院からの返答に「徳川家より寛政三年亥四月御預ケ相成候」とあることからすると、それから間もなく、建中寺にて五ヶ寺へ配分があったと察せられる。

それでは、このとき実際に預けられた品々を確認してみたい。表2には明和五年の「入記控(c)」に挙げられた品々をまとめたが、仏像や仏画については主題に触れない場合もあり、残念ながら全ての作品は特定できない。記載された品は、仏像八件十点・仏画二十二件二十二点・その他經典仏具類十件の合計四十件である。

一方、表3には寛政三年の「建中寺初願目録(d)」に挙げられた品々をまとめたが、この内容は「仏画類御談示ニ付御届(a)」とほぼ同じであり、一部「建中寺初願目録(d)」のみに記録されている品もある。記載された品は、仏像十一件十一・点・仏画二十一・点・その他經典仏具類九件の合計四十一件である。「入記控(c)」と比較すると、仏像と仏画で一点ずつの増減があり、あるいは誤記かとも思われる。また、その他經典仏具類の一件減については、「入記控(c)」に記された「仏之書付」(表2・整理番号39)が見られないため、これが原因であるとわかる。従って、寛政

三年に建中寺において配分された仏像・仏画類は、建中寺の願いにある通り、明和五年に預けられていた品々がほとんどであると判明する。仏画に關して言えば、寛政三年の「建中寺初願目録(d)」に挙げられた品二十一点は、明和五年の「入記控(c)」に記載された品二十二点にすべて含まれていると考えられる。

本稿で扱う春日曼荼羅についても記載を確認していきたい。まず「建中寺初願目録(d)」は「仏画類御談示ニ付御届(a)」とほぼ同様の内容であり、徳川甲本・乙本のいずれとは判断できないものの、建中寺および相応寺に一点ずつ「春日曼荼羅」が挙げられている。先述の通り、このことから「入記控(c)」にも春日曼荼羅二点が含まれていると推定できる。実際、「入記控(c)」には「春日まんだら」(表2・整理番号28)が確認でき、注記にある表具の説明からして、徳川甲本であると判明する。このほか春日曼荼羅を明確に指し示す項目はないが、表2・整理番号6の仏画には「上下茶地金入中風帯萌黄地金入軸めつき」と注記があり、徳川乙本と共通するためこれと比定できる。

現段階では「入記控(c)」を遡る伝来は不明であるが、徳川乙本が明和五年の時点で尾張徳川家に保管されていたことが明らかとなった。春日信仰に基づく遺品については、渡辺氏により尾張徳川家と姻戚関係にあった藤原北家の嫡流近衛家から伝来した可能性が指摘されている。¹⁷ 明和五年以前に近衛家から室や養女に迎えられた女性は何人か確認できるため、どの人物の関連する品であるかを特定することは困難であるが、「入記控(c)」に挙げられた品の中には光背や台座のみで伝わっている仏具(表2・整理番号35および36)が含まれていることからして、長年遺品として保管されてきた品であったと推察される。

ところで、これらは文政元年から遠からぬ頃に万松寺宝蔵へ移されたわけであるが、「万松寺目録(b)」には興味深い記載がある。

法宝之部

(中略)

一 無量寿経

上下 二軸

箱入

一 円光大師略伝

三軸

前分春日曼荼羅ト三品一筐入

これは法宝之部二十三件のうち、二十二および二十三件目の記述である。両者とも現所在は不明であるが、後の蔵帳によれば、いずれも版本であるという。¹⁸ 注目すべきは二件の下部中央に「箱入」とあり、「春日曼荼羅」と共に納められていると注記されていることである。先の通り、本史料において春日曼荼羅は二種の異なる名称で区別して記録されているため、ここにある「春日曼荼羅」は本稿で扱っている徳川乙本と判明する。¹⁹

では、この三件はどの時点で一箱に納められたのであろうか。「無量寿経」は明和五年・寛政三年のいずれの時点の目録にも記載がないが、「円光大師略伝」は明和五年「入記控(c)」から名前が挙がっている(表2・整理番号31)。寛政三年「建中寺初願目録(d)」の内容は表3・整理番号16を参照いただくこととし、ここでは明治七年に寛政三年の留記を写した「仏画類御談示ニ付御届(a)」の目録の内容を確認しておきたい。「仏画類御談示ニ付御届(a)」には冊子下部に付箋が付されているため、その内容を併せて記載する。

(建中寺 二十三件のうち十六件目)

一 円光大師略伝

巻軸

(付箋)箱斗有之

略伝無御座

この付箋は、他の付箋の内容からしても、「仏画類御談示ニ付御届(a)」が記された明治七年時点における注記であると考えられる。従って、文化十四年に「円光大師略伝」そのものは寺社奉行へ差し戻され、明治七年には箱のみが建中寺に残されていたとわかる。このことからして、「円光大師略伝」は建中寺が預かっている間に別の箱、すなわち徳川乙本および「無量寿経」との共箱に納められたと推定される。徳川乙本は寛政三年の五ヶ寺への配分の際、建中寺へ納められた可能性が高いと言えよう。

春日宮曼荼羅と無量寿経および円光大師略伝には思想的な共通性はなく、これらが建中寺において同一の箱に納められたことには疑問が残るが、寛政三年の建中寺初願に「朝暮香華供養等も仕度」とある通り日々供養されていたとすれば、便宜的にそうしたとも考え得る。また「円光大師略伝」の員数について、寛政三年の「建中寺初願目録(d)」および「仏画類御談示ニ付御届(a)」において「巻軸」であったのが、「万松寺目録(b)」では「三軸」に変化していることについても、やはり寺僧が供養するのに適するよう、装丁を変えた可能性が考えられる。いずれにせよ、今は徳川乙本が浄土信仰の遺品と共に納められていた時期があったことと、建中寺へ配分され遺品として日々供養されていた可能性が高いことを指摘するにとどめたい。

むすび

これまで述べてきた通り、徳川乙本は室町時代、十五世紀に製作された春日宮曼荼羅定型図様の一作例であると考えられる。紙形を用いた製作を裏付けるように、ほとんどの建築物・風景モチーフが春日宮曼荼羅諸本と一致していたが、一部の建築物には変化も見られた。この変化は十四五世紀の作例と共通しており、この時代における紙形の特徴と捉えられることを指摘した。また、春日山の形態は定型化に伴うモチーフの単純化を示していた一方で、本社四宮と若宮の尊像には緻密な描写が観察でき、定型化し量産される状況であっても尊像表現には特別に注意を払っていたことがわかった。

本図の伝来については「江戸御小納戸日記」により、寛政三年を遡る明和五年には尾張徳川家に遺品として保管されており、その年に他の仏像・仏画類とともに建中寺に預けられたことが明らかとなった。これらの仏像・仏画類は建中寺の願いにより寛政三年に建中寺を含む浄土宗五ヶ寺に配分されたが、その際、徳川乙本は建中寺に配されたと推察した。そして文化十四年に寺社奉行へ引き渡されるまでの間に、浄土信仰の遺品と同箱に納められた可能性を指摘した。本図が高位の人物の遺品として、藩内浄土宗寺院のなかでも最も格の高い尾張徳川家の菩提寺・建中寺へ預けられ、長年供養されていたことがわかり興味深い。

春日宮曼荼羅の研究において、平安・鎌倉時代の作例に比較して室町時代以降の作例は研究が少ないのが現状である。しかし徳川乙本は、室町時代に製作されて以降、貴顕の春日信仰を支え、江戸時代には大名家の菩提

寺に納められて供養され、その後も什物として保管された伝来を持つ作例であった。現在ではあまり注目されない作品であっても、伝存する作例にはそれぞれに考察すべき観点があり、改めて個別に研究する重要性が確認できたと考える。今後は、先行する作例の研究成果を踏まえつつ、室町時代の春日宮曼荼羅についても個別の作品研究がなされ、発展的な成果に繋げていくことが期待される。本稿がその一助になれば幸いである。

註

- (1) 本稿では、総称としての「春日曼荼羅」と一分類としての「春日宮曼荼羅」を区別して用いる。ただし、作品の伝来について言及する第三章では、江戸時代の名称に現在の分類方法を適応できないため、この対象としない。
 - (2) 渡辺里志「不空絹索観音像の描かれた春日曼荼羅図―徳川美術館本春日曼荼羅図について―」『金鯢叢書』第十六輯 徳川黎明会 平成元年十月三十日。
 - (3) 主要な先行研究は次の通り。

亀田孜「九条兼実の春日社と南円堂への信仰」『国宝』六卷一〇号 国宝社 昭和十八年十月〈同『日本仏教美術史叙説』所収 学藝書林 昭和四十五年四月三十日〉。

永島福太郎「春日曼荼羅の発生とその流布」『美術研究』第百三十三号 美術研究所 昭和十八年十二月二十五日。

近藤喜博「春日若宮影向図」〔『國華』八〇二号 國華社 昭和三十四年一月一日〕。

松村政雄「春日曼荼羅」〔東京国立博物館編『MUSEUM』第九十八号 美術出版社 昭和三十四年五月一日〕。

松村政雄「吉祥天厨子絵より見た南都絵所座の一考察」〔『仏教芸術』四〇号 仏教芸術学会 昭和三十四年九月三十日〕。

景山春樹「神道美術の研究」〔神道史研究叢書 第三冊〕山本湖舟写真工芸部 昭和三十七年六月十日。
- 川村知行「春日曼荼羅の成立と儀礼」〔『美術史』一一〇号 美術史学会 昭和五十六年三月三十日〕。
- 行徳信一郎「湯水美術館蔵「春日宮曼荼羅図」」〔九州芸術学会編『九州芸術学会誌 デアルテ』第八号 西日本文化協会 平成四年三月三十一日〕。
- 行徳信一郎「影向と自然と―陽明文庫蔵 春日鹿曼荼羅図―」〔『國華』一一七三号 國華社 平成五年八月二十日〕。
- 行徳信一郎「春日宮曼荼羅図の風景表現―仏性と神性のかたち―」〔MUSEUM』第五四一号 東京国立博物館 平成八年四月十五日〕。
- 松村和歌子「春日宮曼荼羅 各部名称」〔『春日の風景―麗しき聖地のイメージ―』根津美術館 平成二十三年十月六日〕。
- 藤原重雄「垂迹曼荼羅の環境・景観描写ノート」〔津田徹英編『仏教美術史論集2 図像学―イメージの成立と伝承(密教・垂迹)―』竹林舎 平成二十四年五月十五日〕。
- 谷口耕生「南市町自治会所蔵春日宮曼荼羅試論」〔論集・東洋日本美術史と現場―見つめる・守る・伝える― 竹林舎 平成二十四年五月十五日〕。
- 白原由起子「法隆寺所蔵春日宮曼荼羅考―春日宮曼荼羅の図様展開に関する試論(此君) 第四号 根津美術館 平成二十五年三月十日〕。
- 松村和歌子「春日宮曼荼羅と杜頭景観の史料」〔『此君』第四号 根津美術館 平成二十五年三月十日〕。
- 白原由起子「春日宮曼荼羅研究の現在―作品研究の成果と試論―」〔『哲学』第一三二集 三田哲学会 平成二十六年三月〕。
- (4) 以下、春日宮曼荼羅の諸本に限り、混同を避けるため、初出から所蔵者名を冠して「〇〇本」と略称し、特記事項があれば続けて()内に記載する。
 - (5) 註(3)松村和歌子「春日宮曼荼羅 各部名称」および同「春日宮曼荼羅と杜頭景観の史料」。なお「春日宮曼荼羅 各部名称」は、春日社域の古い景観を示している根津美術館本(鎌倉時代十三世紀、重要文化財)および法隆寺本(鎌倉時代十三世紀)、絵絹が比較的大きく描写の緻密な奈良南市町自治会本(鎌倉時代十三世紀、重要文化財)の三点に注釈を付ける形で提示されている。
 - (6) 徳川乙本では本社内院、本殿背後の区域に八雷社のほか三つの摂末社が描か

れているが、南市町自治会本では栗柄(隼明神)・海本・佐軍・杉本の四社が描かれており、これが本来の過不足ない景観であると考えられる。撰末社は小さなモチーフであるためか、諸本で描かれ方にかなりのばらつきがある。それを考慮すれば、徳川乙本はこの部分を除き、画面全体にわたってほぼ正確に主要な建築物を描いていると言えよう。

(7) 註(3) 行徳信一郎「春日宮曼荼羅の風景表現―仏性と神性のかたち―」など参照。

(8) 註(3) 松村和歌子「春日宮曼荼羅と社頭景観の史料」。

(9) 註(3) 白原由起子「春日宮曼荼羅研究の現在―作品研究の成果と試論―」によると、例えば十二世紀前半に創建された東西御塔は治承四年(一一八〇)の南都焼討で焼失し、東御塔は建保五年(一一二七)、西御塔は寛元四年(一一四六)からそう隔たらない時期に再建された。しかし応永十八年(四一一)の雷火で再び焼失し、その後は再建されていない。

(10) 白原氏は、やはり定型化以前の作例について、実際の殿舎の状況との直接的な関係が看取されたとした上で、描かれた春日社殿群の造営に関わった興福寺僧や宗徒にとつては春日社への貢献の証であり、それが現実感に繋がることを論じている(註(3) 白原由起子「法隆寺所蔵春日宮曼荼羅考―春日宮曼荼羅の図様展開に関する試論」)。これを定型化図様の、外院の板倉や社務関係の建築物にも適応できるか否かについてはさらなる検討を要するが、いずれにせよ、紙形を変化させる必要性は現実感とは切り離して考えられない。

(11) 本図の御蓋山にも用いられる、色とりどりの木々で山容を表す描法については、行徳氏の指摘する通り、「一遍上人伝絵巻」巻五(正安元年(一一二九)成立)や「春日権現験記絵巻」巻十九(延慶二年(一一三〇九)成立)などにも見られ、一三〇〇年を前後する時期にはすでに、山容表現のひとつの型として広く行われ

ていたと考えられる(註(3) 行徳信一郎「湯木美術館蔵「春日宮曼荼羅図」」。

(12) 註(3) 行徳信一郎「春日宮曼荼羅の風景表現―仏性と神性のかたち―」。

(13) 他の宮曼荼羅においても正面向きの形式が多く、春日曼荼羅においてもこの形式が本流であると考えられる。

(14) 山本泰一「尾張徳川家における仏教遺品の収蔵について―徳川美術館保管の仏画を中心に―」(『金鯢叢書』第十一輯 徳川黎明会 昭和五十九年六月三十日)。

(15) 山本氏は註(14) 前掲論文において、寛政三年の「尾張御小納戸日記」が欠失し、「源明様御代御記録」の同年条にもそれらしい記事がないため、経緯はたどれない旨を報告している。

(16) 建中寺初願には「五ヶ寺」と明記されているものの、最後に記された差出人は高岳院・大森寺・相応寺・建中寺の四寺のみであり、性高院が抜けている。写し間違いと考えられる。

(17) 註(2) 前掲論文。

(18) 明治時代に入ってから作成された「万松寺御預 仏像類目録」の写本には、作品を調査して記入したと見られる詳細情報が加筆されている。これによると無量寿経・円光大師略伝はともに版本であり、無量寿経には「版本二付書籍部へ編入」という付箋が付されている。

(19) 現在、徳川乙本は大正期に製作されたと見られる箱に一幅で納められている。

【付記】 本稿執筆にあたり御指導・御教示を賜りました諸先学に、この場を借りて感謝申し上げます。また図版掲載につきましては、各御所蔵者の御高配を賜りました。記して深く御礼申し上げます。

(美術館 学藝員)

表1 春日宮曼荼羅 主要風景モチーフ一覧

凡例

- ・本表は、行徳信一郎「春日宮曼荼羅図の風景表現―仏性と神性のかたち―」所収「春日宮曼荼羅図 主要風景モチーフ一覧表」をもとに作成した(註3参照)。
- ・作品数欄には、行徳氏が比較対象とされた作例二十七点における該当点数を示した。ただし写し崩れなどにより判然としない場合(行徳氏表中の記号「△」は除いた。
- ・徳川乙本欄には、徳川乙本にモチーフが描かれている場合「○」を付した。

場所	名称	備考	作品数	徳川乙本
①内院	A 築地堀沿いの杉		26	○
②中院	B 稲垣前の棕櫚		3	
	C 影向杉		23	○
	D 大杉カ	現在の杉の位置にある樹木を示しており、樹種は特定されていない。徳川乙本の場合にも、樹種は不明ながら大木として描かれている。	13	○
③外院	E 幣殿前の藤		2	
	F 南門外東方の梅		17	
	G Fの隣の桜		6	
	H 南門外西方の梅		4	
	I 榎本滝		9	○
④若宮社	J 瑞垣内の樹木		3	
	K 瑞垣外基壇上の樹木		7	
	L 瑞垣内社殿背後の木立		4	
⑤参道沿い	M 祓戸社背後の樹木	祠を背後から覆うような形の樹木。	24	○
	N 神垣森	藤鳥居の両脇の築地堀をはさむ木立。	19	○
⑥一鳥居付近	O 馬出・馬止橋間の杉木立		11	○
	P 一鳥居円柱の榊		6	
	Q 影向松		19	○
	R Qの隣の松(桜)		15	○
	S 群生する松	同一の根株から群生したように描かれる。	9	○
	T 金泥の土坡		6	

表2 江戸御小納戸日記 明和五年「入記控(c)」一覧

凡例 ・ 本表の表記は史料の表記に従った。

・ 名称欄の()内には、注記に名称に準じる記載がある場合、その内容を補記した。

・ 注記欄には、作品の特定が困難な場合および本稿に関わる品である場合に注記の内容を記した。ただし厨子・箱に関する記載は略した。

・ 寛政三年預け先欄には、江戸御小納戸日記 寛政三年「建中寺初願目録(d)」により預け先となった五ヶ寺が判明する場合に、建中寺・相応寺・大森寺・性高院・高岳院の各頭文字を記した。

整理番号	名称	注記	厨子・箱	員数	寛政三年 預け先
老番					
1	仏	但木仏(以下略)	御厨子入	一鉢	
2	仏	但焼物(以下略)	御厨子入	一鉢	建
3	仏(三尊弥陀)	(略)	御厨子入	一鉢	高
4	仏(三尊)	(略)	御厨子入	一鉢	
5	仏(鑄物阿弥陀)	(略)	黒塗御紋付箱入	一鉢	性
6	観音	(略)		一鉢	性
式番					
7	仏	但木像(以下略)	御厨子入	一鉢	
三番					
8	仏画御掛物	上下紫綾中茶地牡丹唐草模様風帯茶地金入軸水晶		一幅	
9	同	上下茶地金入中風帯萌黄地金入軸めつき		一幅	
10	同	上下白綾中風帯萌黄地錦軸めつき唐草毛彫		一幅	
11	同(善光寺如来)	(略)		一幅	相
12	同(釈迦仏三尊)	(略)		一幅	建
13	同	上下浅黄緞子中風帯茶地銀入軸めつき蓮模様		一幅	
14	同	上下藤色金入中風帯茶地金入軸めつき蓮模やう		一幅	
15	同	軸めつき蓮もやう		一幅	
16	同(不動)	(略)	はこ入	一幅	高

17	同(薬師如来)	(略)	箱入	一幅	大
18	同(弥陀来迎)	上下紺綾中風帯萌黄地金入軸めつき唐草毛彫	はこ入	一幅	
19	同(梵字文殊)	(略)	箱入	一幅	相
20	同(元祖上人古文字内数編名号)	(略)		一幅	建
21	同(夢想弥陀如来)	(略)	箱入	一幅	建
22	同(阿弥陀)	上下紫金入中茶地金入一文宇風帯萌黄地金入軸めつき蓮もやう	箱入	一幅	
23	同(将軍地藏)	(略)	箱入	一幅	相
24	同(虚空蔵大菩薩)	(略)	箱入	一幅	建
25	同(釈迦)	上下茶地金入中風帯茶地金入軸めつき蓮もやう	箱入	一幅	
26	同(南無阿弥陀仏)	(略)	箱入	一幅	建
27	同(掛物南無阿弥陀仏)	(略)	箱入	一幅	建
28	同(春日まんなたら)	上下白地金入中風帯萌黄地金入軸めつき	箱入	一幅	相
29	同(正観音)	(略)		一幅	
30	法華経	(略)		二軸	建
31	円光大師略伝	紙表紙木軸		一軸	建
32	心経	(略)	箱入	一軸	建
33	天満天神真翰	(注記無)	箱入	一軸	建
34	弁財天像	(略)		三鉢	相・大・高
35	後光台座共	(略)		壺	建
36	後光	(略)		大小二ツ	建
37	観音経	(注記無)		二卷	建
38	金光明最勝王経	(注記無)		十卷	建
39	仏之書付	(注記無)	はこ入	二遍	
40	百万御扁珠数	(注記無)		一連	建

表3 江戸御小納戸日記 寛政三年「建中寺初願目録(d)」一覽

凡例

- ・ 本表の表記は史料の表記に従った。
- ・ 注記欄には、注記がある場合にその内容を記した。
- ・ 仏画類御談示ニ付御届(a)欄には、「建中寺初願目録(d)」と比較し「仏画御談示ニ付御届(a)」に該当する品の記載がない場合、「記載無」と示した。

整理 番号	名称	注記	厨子・箱	員数	仏画類御談示ニ 付御届(a)
建中寺					
1	阿弥陀如来	但木仏立像	御厨子入	一鉢	
2	釈迦如来	但焼物	御厨子入	一鉢	
3	中尊観世音 脇立二尊		箱入	一鉢	
4	釈迦仏三尊		同	一鉢	
5	中尊釈迦仏 脇立菩薩八鉢		同同	一幅	
6	三尊釈迦如来		同	一幅	
7	観経曼荼羅		同	一幅	
8	三尊阿弥陀如来		同	一幅	
9	元祖上人古文字内数遍名号			一幅	
10	阿弥陀如来	瑞竜院様御夢中御感得	箱入	一幅	
11	虚空蔵大菩薩		同	一幅	
12	南無阿弥陀仏		同	一幅	
13	同		同	一幅	
14	春日曼荼羅		同	一幅	
15	法華経		同	二軸	
16	円光大師略伝		同	一軸	
17	心経		同	一軸	
18	天満天神御真翰心経		同	一軸	
19	後光台座とも	(略)		一遍	

41	40	39	高岳院	38	37	36	性高院	35	34	33	大森寺	32	31	30	29	28	27	26	25	24	相応寺	23	22	21	20
弁財天之像	不動明王	三尊阿弥陀如来		釈迦如来	観音	阿弥陀如来		弁財天之像	薬師如来	三尊阿弥陀如来		弁財天之像	正観音	將軍地藏	梵字之文殊	善光寺如来写	真言曼荼羅	春日曼荼羅	文殊菩薩聖德太子	阿弥陀如来		百万遍誕生棕珠数	金光明最王經(ママ)	観音經	真鍮後光
					但焼物															但木仏					(略)
	箱入	御厨子入		箱入	箱入	黒塗御紋付箱入			同	箱入			同	同	同	同	同	箱入	箱入	御厨子入			同	箱入	
一鉢	一幅	一鉢		一幅	一鉢	一鉢		一鉢	一幅	一幅		一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一鉢		一連	二卷	二卷	大小二遍
				記載無	記載無	記載無				記載無															

金 鯨 叢 書 第四十二輯 [年一回刊行]
— 史学美術史論文集 —

平成二十七年 三月 三十日 編集
平成二十七年 三月 三十日 印刷・発行

編集者 竹 内 義 誠
徳 川 崇

〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一
公益財団法人 徳川黎明会
電話 (3950) 〇一一二番 (代)

〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一
徳川林政史研究所
電話 (3950) 〇一一七番 (代)

〒461-0023 名古屋市東区徳川町一〇一七
徳川美術館
電話 (935) 六二六二番 (代)

〒605-0089 京都市東山区元町三五五
株式会社 思文閣出版
電話 (751) 一七八一番 (代)

〒600-8805 京都市下京区中堂寺鍵田町二
株式会社 図書同朋舎
印刷所 電話 (361) 九一二二番 (代)